OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

狭岑島流人島説批判

―― 梅原猛『水底の歌』を読む ――

桂　　孝　二

梅原猛氏の『水底の歌――柿本人麻呂論――』では、讃岐国狭岑島を流人島とし、そこへ人麻呂が流人として流されてきたとある。その根據が極めて乏しいということを本稿で記そうと思うのであるが、まず氏の説を見渡して見よう。

（1）

柿本人麻呂は紀や続紀に見えないが、柿本氏の人物としては天武10年12月に小錦下（従五位下に相当）を授けられた柿本臣猨という人物が紀に見え、そして続紀に和銅元年4月20日に従4位下柿本朝臣佐留が卒したと見える。この間に朝臣の姓（カバネ）を授けられ、従四位下まで昇進したと考えられる。柿本人麻呂はその死去の時の自傷歌の詞書に「柿本朝臣人麻呂在石見国臨死時自傷作歌」とあって、佐留の「卒」に対し「死」の字が用いられている。これは、延喜式によれば、親王および3位以上は薨、4位5位および皇親は卒、6位以下は死というとある。(この項契沖の代匠記による）それ故、人麻呂は6位以下で佐留と同時代の人物であるが別人であろうと従来考えられて来た。

田辺爵氏は「柿本人麻呂は佐留か」（「日本文学」昭26）で人麻呂、佐留を同一人物かとしつつ、位が違うのでその決定をためらっていられるが、しかし、薨と書かれるべき人物でも刑死の場合は死と書いていることに気付いた。しかし、人麻呂が刑死したとは思いもよらぬので、この点を、同一人説の致命的な障害であるとされた。梅原氏は人麻呂を刑死したが故に死と書かれたのであって、佐留・人麻呂同一人説を採っている。ここで考えるのだが、同一人だったらどうして佐留の方は「卒」と書かれ、「死」と書かれなかったのかを不審に思う。

さて、梅原氏は人麻呂即佐留と考え、令義解官位令によれば、従四位下に相当する官は、神祇伯と中宮大夫と東宮大夫とであり、神祇伯は中臣氏の世襲する

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ところであったから人麻呂は残るところの中宮大夫が東宮大夫かであったというのである。古今集漢文序に柿本大夫とあるのもこの考え方を支持する資料となるのであろう。

さて、その人麻呂が近江国へ流されたというのである。古今集漢文序などに見える伝説的人物猿丸大夫を氏は柿本佐留即ち人麻呂と考えられ、その猿丸大夫隠棲の地と伝えられている近江国曽束を人麻呂が流罪となって流されたところと氏は考える。その流罪の理由は、一読したところでは明らかでない。江戸時代延宝期の刊本「人丸秘密抄」から不比等の娘、後の文武の夫人宮子を犯かしたことかと疑い「私は彼の流罪の理由は裏には政治的理由があったとしても表向きは女性関係ではなかったかと思う」と書いていられる。

もののふの八十宇治川の網代木にいさよふ浪のゆくへ知らずも（巻3．264）という歌の詞書は「柿本朝臣人麿、近江国より上り来る時、宇治川の辺に至りて作る歌一首」とあるので、近江荒都を見ての帰途の作と考えられているが、氏は近江へ流罪の時、宇治川辺で詠じた作とされている。詞書中の「上る」を「下る」と改めるのであろう。その方が一段と哀感がこもるが、万葉集の詞書を自由に変更してよいものだろうか。

近江に流されても人麻呂はなお好色と政治的陰謀とをやめようとしないので、狭岑島へ追放しようと藤原不比等らをはじめとする政治権力者は思ったに違いないと氏は考えている。そして人麻呂は近江より讃岐国狭岑島へ流された。そして、さらに石見国仁麻近くの陸からすこし離れた韓島へ流されたと考え、人麻呂はその地で妻とともにいた。そして人麻呂はまたしても場所を移される。その時の歌が万葉集巻2の「柿本朝臣人麿、石見国より妻に別れて上り来る時の歌2首」であるという。益田市の今は水没して無くなったという鴨島へ移される。妻と再び逢えるかどうか分らない罪人人麻呂は西へ進んでゆく。万葉集の詞書は疑はしいものが多いというのである。そして和銅元年の初夏のある日（佐留の死んだ4月20日を頭においているようだ）「詩人は舟にのせられて、海に投げこまれたのであろう。ひよっとしたら、詩人の首には重い石がつけられていたかもしれないが、この60を越えていたのでないかと思われる都の詩人に、荒海を泳ぎ切ることができるとは思えない。詩人は悲鳴をあげて海に

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

落ち、そしてたちまち波間に沈んで見えなくなったのであろう。……」とその死の場を氏は想像している。これではいつ人麻呂が「鴨山の岩根し枕ける…」という「臨死時自傷作歌」を作ったのかわからない。それはともかく、これが、本書の書名となっているわけである。

そして、人麻呂の死後、いくばくもなく人麻呂は神として祭られている。(これは本当であろうか。)神として祭られる人物はタタリをする人物であるとする柳田氏の説が引用され、また、人麻呂の忌日は3月18日とされていることに注意した柳田氏の言を受けて、崇道天皇ら怨霊の鎮魂もその日は彼岸会であると述べ、怨霊を祭る日を忌日とする人麻呂、神に祭られている人麻呂を死後怨霊となったというのが氏の考えである。

1,300枚という長篇で、整然と書かれていないこの書から、人麻呂の伝記的な部分をまとめたのが以上である。それ故に、人麻呂時代の政治情勢や万葉集編纂のことなどについての著者の意見の多くを省略した。

この梅原説には、茂吉批判、真渕批判などに中々良い着眼があるが、批判すべきことを主として述べてみよう。小さいことを言い出すときりがないほど欠点があるが、大きい点について私見を述べてゆこうと思う。

(1)　人麻呂は佐留でない。また大夫でもなかった。

(2)　古今集かな序の人麻呂3位説はうべないがたい。

(3)　狭岑島流人島説は根據がない。

(4)　人麻の流罪刑死は信じがたい。

(5)　人麻呂の「臨死時自傷作歌」の鴨山は山間地帯と考えられる。

(6)　人麻呂怨霊説は疑問である。

こう書いてくると氏の説の大部分を私は否定し、あるいは疑問を抱いていることになる。以下、私の論據を書いてゆこう。

（2）

まず、氏は人麻呂は天下第一の詩人である。それ故に微官ではないとされているようであるが、名家の出でなく、専門的歌人はおおむね微官であったことは、古今集の選者4人、後撰集の選者、梨つぼの5人が微官であったことからも推察される。万葉歌人にしても名家の出である大伴旅人、家持を除けば、山

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

上憶良にして筑前守で終ったのだから従五位下であったろう。他の高市黒人、山部赤人、高橋蟲麻呂等はさらに微官であったろう。梅原氏は天武天皇13年の８色の姓（カバネ）制定に際し、柿本氏が臣から朝臣となったことを神田秀夫氏の説を受けて高く評価しておられ、大伴氏が宿称にとどまったことと比較して「名門大伴氏の疏外と新興柿本氏の登場」と言っていられるが、いわれのないことである。

この８色の姓のうち真人を賜った家は、応神以後の皇別であり、朝臣を賜ったのは景行以前の古い皇別の家である。例外として、三輪氏、物部氏、中臣氏らの神別が朝臣を賜っているのは、いずれも祭祀にかかわりのある家であったからであろう。ことにわが讃岐の地方豪族、綾郡か宇多郡の郡領程度であったらしい綾君までが皇別の故をもって朝臣を賜っているので、柿本氏が朝臣を賜ったことをそう大騒ぎするほどでもあるまい。

宿禰を賜った中に、中臣氏、物部氏の流れもあるが、傍流であって、祭祀にかかわりが少なかったのであるまいかと私考するが、この点は実は未調査で、想像で言っているだけである。そして宿禰を賜ったのは、皇別も若干あるが、おおむね神別である。神別というのは天皇家の譜代の臣下の家柄と考えられる家々であろう。皇別で宿禰を賜った家と朝臣を賜った家との間に何らかの違いはあろうが、神別のうち主なものは宿禰を賜っているので大伴氏が特に疏外されたとは思えない。

今、公卿補任によれば、天武御代、７人の公卿のうちに大納言大伴望陀連が居り、文武の大宝元年には大伴宿禰御行が大納言であり、その薨去の正月15日には右大臣に任ぜられている。そして、その年、大伴宿称安麿が中納言に任ぜられている。その安麿は慶雲３年（文武崩の前年）には大納言になっている。この年の公卿は９人である。９人のうちの第４位に安麿は位置している。梅原氏が「名門大伴氏の疏外」と言っているのはいわれのないことである。天平３年のごときは、大伴旅人が、知太政官事舎人親王につづく第２の地位となっているのである。旅人の薨去後は、早速、大伴宿称道足が参議に任ぜられて公卿に列しているのである。梅原氏の言う新興柿本氏は、一番位の高い佐留にして従四位下であって、公卿には列していないのである。些細なことであるが、

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

一言、大伴氏のために辯じておく。

令義解の公式令には、姓（カバネ）の置き方がいろいろと記されている。万葉集での人名の書き方と大体一致しているので、万葉集によって簡単に記してみよう。

公卿クラスはこうなる。藤原鎌足は内大臣藤原卿。大伴御行は大将軍贈右大臣大伴卿。大伴安麻呂は、大納言大伴卿、大納言兼大将軍大伴卿。大伴旅人は帥大伴卿、太宰帥大伴卿、大納言大伴卿。石上麻呂は石上大臣。藤原宇合は宇合卿。藤原仲麿は内相藤原朝臣。それから、中納言安倍廣庭卿がある。これによれば、姓（カバネ）や名前（鎌足や御行など）を書かない。ただし、右の最後の３人がやや違っていて、藤原や、卿やを書かなかったり、広庭という名を書いたりして、他と違っている。

４位クラスや国司になるとこうである。京職藤原大夫（藤原麻呂のこと）。兵部卿橘奈良麻呂朝臣。当麻麻呂大夫。衛門督大伴古慈斐宿禰。大伴宿奈麿宿称。梅花宴での上席の客人は、大弐紀卿。少弐小野大夫。少弐粟田大夫。筑前守山上大夫。豊後守大伴大夫。筑後守葛井大夫とある。国司を大夫とも言ったらしく、田口益人大夫というのは上野国司であった。

また247の歌の作者は石川大夫と書かれているが、左注では、従四位下石川宮麻呂朝臣が慶雲年中に大弐に任ぜられた。また正五位下石川朝臣吉美候（キミコ）が神亀年中少弐に任ぜられた。この作者石川大夫はどちらか明らかでないとある。４位の人には朝臣などのカバネを下に書き、五位の人にはマン中に置いている。これが、そのカバネの書き方なのである。

５位の人のカバネの書き方は山上臣憶良と書くべきであるが、５位以下にもこの書き方をしているようである。高橋連蟲麻呂のごときである。蟲麻呂は藤原宇合に仕えていたかに察せられ、５位ではあるまいが、公式令による５位の書き方をしている。

もっともカバネのついていない人もあって坂門人足、置始東人、大伴四縄のごときである。これらはさらに微官であったのであろう。

また、山上憶良臣というのが１か所見えるのは特に敬意を表したのであろう。藤原清河は参議正四位下で、遣唐大使となって、藤原大后から歌を賜った

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

が、その時の答歌には大使藤原朝臣清河と記している。つまり大后に対するへりくだりで、こうカバネを氏名の中へはさみ込んだのであろう。

日本書紀ではこのカバネの書き方を正しく書いている少数の個所とそうでない多数の個所とがある。調べてみるとおもしろいことが分るかも知れない。

柿本人麻呂が従四位下佐留と同一人物で中宮大夫もしくは東宮大夫であるなら、当然中宮大夫柿本朝臣または柿本大夫、または柿本人麻呂大夫とあるべきであるが、そういう例は全く無く、常に柿本朝臣人麻呂と書かれているのは、人麻呂と佐留とが別人であったことを語るものである。

人麻呂を大夫と呼ぶ唯一の例は古今集漢文序であり、そのかな序では「おほきみつのくらひ」即ち正三位と人麻呂を書いているがうたがわしいと私は思う。梅原氏は死後贈位とされているが、たとえば、菅原道真は、古今集では罪人であり、かつ前大臣でもあったので、菅原朝臣と変則的に書かれているが、拾遺集では贈太政大臣と書かれている。人麻呂贈位が真実なら、古今集本文中にもそのことが見えるはずである。贈位の場合、位だけいただいて官職をいただかなかったのであろうか。正三位なら公卿で、大納言ぐらいのはずである。よく引用される例なので書くのも気がひけるが、古今集撰者のひとり壬生忠岑の、「……あはれむかしべありきてふ人まろこそはうれしけれ身はしもながらことの葉をあまつ空まで聞えあげ……」という歌は、古今集撰集に際し、古歌を天皇に奉った時に添えた歌なので、天皇に対し、「身はしもながら」人麻呂はと、へり下ったとも解せられるが、贈三位の場合はもちろん、従四位下ぐらいであっても、こうは言うまいと思われる。こう言っている忠岑は当時無位だったのであるから。

また、古今集でも作者名の書き方に一定のきまりがある。久曽神氏が『古今和歌集成立論研究篇』でまとめていられるのを記すとつぎのとおりである。(1、2は天皇・皇后・親王・諸王についてであるので略し、また6以下も僧尼や内侍、女房についてであるので略する)

3　大臣は官名により姓名をいはない。但し菅原道真はもと大臣であり特別である（筆者が実例を書き添えると、東三条左大臣・前太政大臣など）

4　4位以上の公卿、殿上人は姓名の下に「朝臣」をそへる（在原業平朝臣

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

など）５位以下は姓名のみとする（紀貫之など）

そして、古今集の左注もこの方法で記されている。

1　ある人のいはく、さきのおほいまうちぎみの歌なり。

2　この歌はある人、ならのみかどの歌なりと申す。

3　この歌ある人のいはく、柿本人麿が歌なり。

4　この歌はある人、在原のときはるがともいふ。

上の１、２、３の書き方の場合、歌字を脱している例もある。人麿の場合はその方が多い。つまり「……のなり」「…がなり」というのである。人麻呂をかな序の「おほきみつのくらひ」が撰者に認められていたら「おほきみつのくらい柿本朝臣の歌なり」とあるはずである。そうしていないのは人麻呂を５位以下と見ていたことになる。この点からも人麻呂は佐留でないということになる。佐留ならば、柿本人麻呂朝臣とするはずである。

（3）

万葉集巻３に柿本人麻呂の羇旅歌８首が見える。難波から加古川あたりまでの航行の歌で、西に向う場合と、東に向って帰ってくる場合の歌とがある。

- 淡路の野島が崎の浜風に妹が結びし紐吹き返す（251）
- あらたへの藤江の浦にすずき釣る海人とか見らむ旅行く吾を（252）
- ともしびの明石大門に入らむ日や榜ぎ別れなむ家のあたり見ず（254）

この第２首によれば、人麻呂の乗っている船は釣をしている漁夫の舟とさほど変らず、ほぼ同じ大きさと見られる。武田祐吉氏は「旅行することについて公人としての自負があり、しかも他人がそれを知らないで漁夫と見ているであろうという所には、寂寥感が潜んでいる。」（全註釈）と解されているが、私はそうは思わない。この歌は故郷や家や妻と別れて、遠く不安な旅に出かける心細さを詠じた作品である。当時は旅人が旅で病めば、家族でないかぎり誰も死のケガレを恐れて世話をしてくれなかった時代である。そういう心細い旅に出かける自分を誰も知ってくれないのかという寂寥感であろう。旅についてのこういう心細さは近世の芭蕉でさえも抱いていた。

さて、上の第１首について、武田祐吉氏は「海路第１日の夕方の旅情」と記しているが、土屋文明氏は「２日目か３日目であろう」（万葉集私注）と言って

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

いられる。平安朝初期に瀬戸内海に「5泊」の制が定められて、神崎川河口、大輪田（神戸）、魚住泊（明石）、韓泊（加古川）、室（室津）がそれで、この5泊間をそれぞれの1日の航程としたようである。大和時代は住吉から出発するので、明石までが3日の航程と見られる。上の第3首「明石大門に入らむ日や」というのは、出発第1日の夕方に明石海峡に入るのなら「入らむ」とは言わないと考えられる。出発して、3日目ぐらいを考える方がこの句にふさわしい。むしろ、雨や風浪のため3日目ともきめがたいのであろう。漁夫の釣船にもまがう人麻呂の船では、今日の汽船のような時間的正確さは無かった。そう考えねばこの「入らむ日や」が十分理解できない。同じ、巻3に「柿本朝臣人麻呂下筑紫国時、海路作歌2首」が見え、人麻呂は太宰府へ下ったことがあると見られる。官命によってであろう。

- 名ぐはしき印南の海の沖つ浪千重に隠りぬ大和島根は（303）
- 大君の遠の御門とあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ（304）

そして、先述の羇旅歌8首中には

- 天ざかる夷（ひな）の長道（ながぢ）ゆ恋ひくれば明石の門より大和島見ゆ（同・255）

が見える。遠く西辺に旅し、大和をさして帰り来って、明石海峡に入った時、大和の山山、生駒、志貴、二上、葛城、金剛の連山を遠く仰ぎ見ての高らかな喜びの歌である。人麻呂は九州へゆき、帰っているのである。太宰府まで延喜式によれば海路30日である。

さて、梅原猛氏は都にあって、従四位下で、中宮大夫か春宮大夫の官職にあった柿本佐留即ち人麻呂が、近江国曽束へ流され、ついで讃岐国狭岑島へ流され、最後に石見国韓島へ、そして、最も最後に鴨島へ流され、そこで海中に投げこまれて刑死したとされている。人麻呂が持統天皇の側近の重職から忽ち流罪の身となり、上のように転々と流されたのなら、筑紫国へ下り、そこから戻ってきたのを、人麻呂の生涯中のどこへ梅原氏は入れようとされるのであろう。

人麻呂が讃岐国狭岑島に来たことについて氏は、(1)太宰府旅行の途次説、(2)讃岐国役人としての視察説、(3)四国より本州へ行く途中の潮待ち説をあげ、つぎつぎと否定されている。そして、氏は狭岑島を流人の島であるとされている。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

(1)狭岑島の古墳は人麻呂の時期のもので、島で死んだ都の貴族たちの墳墓である。(2)狭岑島は今日の沙弥島であるが、この名は死のイメージを多分に持った島である。(3)中国の沙門島という島は流人島として有名であると述べていられる。(1)についてはその証はないと思う。考古学の方の調査はどうか。また、沙弥島は塩飽諸島の一つであるが、その塩飽本島にはいくつかの古墳がある。他の島々にはどうか、考古学上の発掘調査を待たねばならない。沙弥島は小さい島で住民もすくなかったろうに古墳が多くあることに不審を述べ、都からの貴族の流人の墓と考えられているようであるが、元来、沙弥島を含む塩飽諸島は、瀬戸内海の村上水軍、河野水軍などとともに水軍・海賊の島であった。そういう海の人々の島であったと考えると、この島の住民は「30戸ぐらいの戸数が限度である」と氏は言っているが、もっと多数が住んでいても良いと考えられるし、他の諸島の人々の古墳が作られたかも知れないとも思う。要するに梅原説(1)は根拠に乏しい。(2)については、万葉集では狭岑の島・佐美の山とあるのでその名はサミまたはサミネが地名で、それに漢字を宛てたのである。沙弥というのも後世にあてたものでアテ字である。また、人麻呂時代の仏教は国家鎮護の仏教と聞いているが、それでは死とは直ちに結びつかない。一九の膝栗毛ではこの島を須弥島と記している。聞きまちがいか、あるいはスミ島と言っていたのか。死のイメージが浮ぶという連想は根拠乏しい思いつきである。それ故に潮待ち説または停泊説を私はとるものである。そして(3)の沙門島説については、いうコトバもない。残る理由として、(4)この人麻呂の狭岑島の歌は「私の人麻呂流人説によって1つの歌が完全に生きかえってくる」といっていられるもので、人麻呂は狭岑島、名さえ忌まわしい沙弥島に上陸しなければならない。人麻呂は庵を作る、おそらく庵を作るのは流罪者の仕事であろうと氏は言う。氏は万葉集を高校時代以後10度読んだと言っていられるが、旅人であれば、旅宿りには庵を作るのは当時の慣習であった。そういう作を氏は無視している。「吾が背子は仮庵（かりほ）作らす草なくは小松が下の草を刈らさね」（巻1.11中皇命――オソラク斉明天皇)「秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治の都の仮庵しおもほゆ」(同・7額田王）というような作がいくつもある。「ゆふだたみ手向の山を今日越えていづれの野辺にいほりせむ吾」（巻6.1017大伴坂上

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

郎女)「大伴の御津に船乗りこぎ出てはいづれの島にいぼりせむ吾」(巻15．3593遣新羅使人）……。氏は、狭岑島の石の間で死んでいる人を、先輩流人の無残な屍と見、そこに自分の運命を見たという。そう解して、氏はこの狭岑島を万葉集随一の歌にしてもいいと思うと言っていられるが、流人島として読めば良くなるとされても、私は、狭岑島が流人島であることがナットクできぬので従えない。またこの歌では、人麻呂は、「中の水門」即ち、丸亀の金倉川の河口より船出している。狭岑島へ流罪になったとするなら、なぜ、本土より、讃岐の中の水門へやって来て、また、狭岑島へ行き着いたのかその理由がわからない。結局、梅原氏が狭岑島を流人島とされる根拠は一つもないのである。

延喜式では備前国から海路９日、讃岐国から海路12日とある。これは庸調を国府から京へ送るその海路の日数で、国府近くの港から淀川をさかのぼって淀までの日数である。備前国、讃岐国の共通部分は児島湾入口ぐらいまでで、備前は、そこから海路１日とすると、共通部分は８日である。その地点から讃岐の坂出付近までの日数は４日である。この場合は庸調を運ぶ船であるから、人麻呂の乗るような釣船とも見られるような船ではない。すると人麿の船では、もっと日数を考えても良いと思う。

なぜ、人麻呂が讃岐へ来たかは資料が無いので分らないが、ともかく人麻呂は中の水門を船出して東行している。これは、都へ帰るためであろう。当時の船は磯づたい、島づたいであった。そこで、坂出あたりから北行すれば、沙弥島・与島・岩黒島・櫃石島と島がつづいていて、山陽道の海岸に着くのである。中の水門から直ちに北行すると、塩飽本島までは、右の島づたいよりは離れているので、上の航路が人麻呂の道であったのであろう。そして、風浪のため沙弥島に上陸したのである。今は番の州工業地帯を造成したため埋立てたので陸つづきとなっているが、以前、沙弥島が島であった時、その南端をママ子が浜と言っていた。潮流が川のように流れて、ママ子いじめにふさわしいところであった。その潮流を人麻呂の船は「かぢ引き折」らんばかりに突ききって狭岑島に着いたのである。狭岑島の北に与島がある。２つの島の距離は約４キロである。そして、この場所は潮の流れがさらに烈しいのである。それ故人麻呂の船は狭岑島に停泊したと考えられるのである。１日分の航程としては短い

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

けれど、人麻呂の船の１日の航程として著しく短いとは言えまい。(注1)

平安朝のことであるが、紀貫之の土左日記を見ると、貫之は外洋ではもちろん、大阪湾や淀川にあってもしばしば航行を休んでいる。２月１日に和泉国の灘を出港し、浪のためもとの港へ、そして、２、３、４と３日休航している。２月10日は淀川に入っているが、その宇土野という所で休航している。和泉国へ着くまでにも、風・浪・雨の他に日が悪くての休航もある。土左の国司の館を出たのが12月21日、京都の自邸に着いたのが２月16日、この間、陸路、海路を進んだのが約20日、他は、送別の宴などが数日含まれているが、休航している。古代の航海がいかに休んだかがうかがわれる。

人麻呂の船が風浪の中で、瀬戸内海の潮流を突ききることなく、狭岑の島で「いほり」を作って１泊することは極めて自然である。

なお、氏は、狭岑島は流人島で、流されてきた人麻呂がそこで見た死人は、人麻呂より早く流された先輩流人である。その死体を見て人麻呂は自分の運命を予見したとされている。しかし、この島へ流された貴族と氏が言うその貴族とはどのへんの貴族をさしているのであろうか。村尾次郎著『律令律の基調』(注2)によれば、「大宝元年、新令の位階制にきりかえた時には、諸王14人、２位以上６人、５位以上の諸臣105人で合計125人あったが、おそらくこれが５位以上のすべてであったのである。」５年後の慶雲４年には、５位以上が男女を合わせて110人であったと言われる。この層を著者は高級官人とされ、６位以下８位までを中・下級官人とされている。中・下級官人の数は同書によれば約500人である。(そしてその下に無位の舎人、兵衛等の宮仕えの人々が約6,000人いたとされている。)

さて、梅原氏はどのぐらいの数の貴族がこの島へ流されたとされるのであろうか。この島におびただしい古墳があり、千人塚と呼ぶ古墳もあるが、この島にそれだけ多くの人が住んでいたとは考えられないと言って、貴族の流人の墓であろうとされているようであるが、そんなに多くの貴族がこの島へ流されたとは到底考えられない。

さて、この狭岑島の石中死人は誰かということについては、大体、私は土屋文明氏の万葉集私註の説に従う。つまり触穢をいとう思想からで、病人ができ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

て、船中でもし死んだら船中がけがれてしまう。そこで、その病人を船からおろして漕ぎ去るのである。そういう実例が円仁の巡礼行記に見える。また、早く孝徳天皇が改むべき愚俗とされた中には、人家に死人をすてれば、祓を要求されるたぐいがあり、狭岑島の人家から離れたところへ病人を置き去りにして漕ぎ去って、その病人が死んでしまったあとへ、人麻呂がやってきたという考えである。

聖徳太子は片岡山で飢え死にしている旅人の挽歌を詠じ、人麻呂もこの沙弥島の他に香具山でも旅人の屍を見て挽歌を詠じている。田辺福麻呂歌集中の一首に、足柄の坂で、旅人の屍を見ての挽歌がある。旅人は、人家近くで看病されることなく、山野で死んで行ったのである。孝徳天皇が愚俗として改むべきこととしたけれど、触穢をいとう思想はずっと日本人を支配したのである。芭蕉が「のざらし紀行」の旅に出かける時の句に「野ざらしを心に風の沁む身かな」というのがある。旅に死んだ人を、骸骨になるまで山野にすてておいたのが、わが触穢をいとう思想である。そう考えると、船中病人を島に棄て去ったことも円仁の経験のみでなく、しばしば行われたことであろうと考える。

（4）

万葉集巻２の終わりの方に、柿本人麿の「臨死時自傷作歌１首」があり、つづいてその妻「依羅娘子作歌２首」があり、つづいて「丹比真人、名闕、擬柿本朝臣人麿之意、報歌１首」、そして「或本歌曰」として１首が収められている。そのうち、ここで、依羅娘子の２首について考えたいと思う。

今日今日とわが待つ君は石川の貝に（一に云ふ谷に）交りてありと言はずやも（224）

この（　）の中は割注で、２行に小さく書かれている。万葉集では、編集者が、作品を集めた時、同じ歌で、コトバのすこし違う歌があった時、一方のみを記さず、もう１つの方をこういう形で収めたのである。これによれば、上の歌の第４句を原文によって記せば「貝爾交而」と「谷爾交而」と２種の伝えがあったのである。そこで、この「貝に交りて」と「谷に交りて」のいずれがコトバづかいとして、自然であろうかということを考えるのが、ここでの私の第一の問題点である。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

今はなき人麿が「谷に交りて」いるというのはおかしいという考えがあるかも知れない。しかし、古今集巻２に、素性法師の「いざけふは春の山べにまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは」という歌が見え、『竹取物語』にも、竹取翁が「野山にまじりて竹を取りつつよろづの事に使ひけり」という語句が見える。従って、「山辺に交る」「野山に交る」の語法が平安朝、古今集のころ、用いられたことがわかる。この「交る」は、「入り込む」の意であると金子元臣『古今和歌集評釈』に見える。

一方、「貝に交る」を主張されている梅原猛氏は、源氏物語宇治10帖の中で、薫大将が、愛人浮舟が宇治川に水死したものと考えてなげく条「から（なきがらの意）をだにたづねず、あさましくても、やみぬるかな。いかなるさまにて、いづれの底のうつせにまじりなむ」（蜻蛉の巻）というのを仙覚の引用に従って、引用されている。これによれば、源氏物語にはうつせ即ちうつせ貝、肉のなくなった貝殻に亡き浮舟が交っているさまを、薫が想像していることがわかる。

「貝」「谷」とも後の世であるが、用例のあることが明らかになった。しかし、私は、「貝に交る」はおかしいと考える。源語の文をよく見ると「いかなるさまにて」という語句がついている。亡き浮舟はどういう状態で交っているのであろうかの意である。これは、人間がそのまま貝に交るのがおかしいという気持ちからに違いない。いうならば貝に埋もれるというべきであろう。

それでは、万葉集では「交る」はどういう意味に使っているであろうか。「万葉集総索引」によれば、「まじり」「まじる」「まじれる」の用例は併せて13例見える。これによって万葉集での「まじる」の語の意が明らかになる。ことごとしいので用例全部は引かないが、その用例によって、まじるの意を考えるとこうなる。

「おもしろき野をばな焼きそ古草に新草まじり生ひは生ふるがに」（巻14．3452）「黒髪に白髪まじり老ゆるまでかかる恋にはいまだあはなくに」（巻4.563）によれば、まじるものの方が数がすくないと見られる。また「潮葦（みなとあし）に交れる草の……」（巻11．2468）によれば、より大きく、多数の葦の中に生える草を、まじると言っている。「風まじり雪はふるとも」（巻8.1445）「風まじ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

り雪はふりつつ」(巻10．1836)「風まじり雨ふる夜の」(巻5．892)「風まじりもみち散りけり」(巻19．4160) とあるのは、広く吹きくる風の中にまじって、雪や雨やもみちが飛び来ることを言ったと思われる。そうすると「雨まじり雪ふる夜は」(巻5．892) は、雨の中にすこしの雪が交っていることを言うのであろう。また、集中に「をみなへし秋萩交る芦城野は」(巻8．1530) という歌が見える。手もとの「古典文学大系」「万葉集全註釈」では「をみなへしと秋萩とが交って咲いている芦城野」(古典文学大系)、「女郎花に秋萩の交る芦城の野」(全註釈) とあるが、以上、見てきたところによれば、古典文学大系の訳をすこしくわしくして「広い芦城野の中に、をみなへしと秋萩が交って咲いているその芦城野……」と解すべきように思われる。この使い方から「春の山べに交りなむ」(古今集)、「野山に交りて」(竹取物語) が出てくると思われるがどうであろうか。以上の解で、交るの全部が見られるようである。「水くくる玉に交れる磯貝の独恋 (かたこひ) のみに年は経につつ」(巻11．2796) という歌は、磯貝の片恋の語から、この貝はあわびのような1枚貝であろうと考えられているが、水中の玉に交っている貝というと、玉の方が多いのはおかしいと考えられる。しかし、この玉は、「玉敷ける清き渚を潮満てば飽かず吾行く帰るさに見む」(巻15．3706)「玉くしげいつしか明けむ布勢の海の浦を行きつつ玉も拾はむ」(巻18．4038) などによれば、浜辺の石、美しい石を玉と言っているので、これらによって「水くくる玉に交れる磯貝の」の玉、海辺の玉のような石が、水中にもたくさんあると考えて、玉の語を使ったと考えるべきであろう。

手もとの岩波国語辞典を見ると、「まじる」について文章として「男の中に女が1人まじる」「イギリス人の血がまじった日本人」の2例をあげている。数と量の多小が、まじるものとまじられるものとの間にあると言っているわけであるが、「風交じり」等の用例を見ると交じるものが小さく、交じられるものが大きいというのを追加せねばならぬと思う。

こう考えてくると、人麿が貝にまじるというのはヘンではあるまいか。大きい人麿が貝の中にまじるというのはオカシイ、そこで、貝説を採った人が、火葬に附して散骨したという苦しい説を出したのであろう。人麿の骨をくだかねば貝にまじれないのである。さきの源語の浮舟の水死については、薫が、水底

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

で浮舟の身体がくずれて、骨がばらばらになって、うつせ貝に交っているのであるまいかと想像したと考えられるのである。「いかなるさまにて……まじりなむ」の「いかなるさまにて」が意味を持っていると私考する次第である。

以上万葉集に見える「交る」というコトバの意味を考えると、人麿が「貝に交る」というより「谷に交る」という方が適切であると結論されると思う。いかがであろうか。

万葉集の歌に割注して記す「一に云ふ云云」は、その上の語と大体同意であるのがふつうである。(その例証は省略する。万葉集で直接見ていただきたい)そういう例にしたがうと「貝」と「谷」はほぼ同意の語をあらわすこととなる。そうすると「貝」は「峡」の借訓であるということになる。借訓というのは江戸時代の学者の用語であるが、「見鶴鴨」という文字で「見つるかも」を書くごときで、「つるかも」を書くに「鶴鴨」という字の訓を漢字の意味によらずに、その訓を借りているごときをいうのである。つまり依羅娘子は、「峡（かひ）に交りて」「谷に交りて」の２案を作った、あるいは伝誦の間に峡と谷との２つの伝えが生じたと考えるのである。（注3）これが本節で私が言おうとする第２の問題点である。

つぎに依羅娘子の第２首である。

直（ただ）の逢ひは逢ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつしのはむ

この歌を梅原氏は娘子が夫の死の現場で歌われたものと見ていられる。しかし、夫の死んだ場所が石川であるとすると、「石川に雲立ち渡れ」の「立ち渡れ」が自分のいる現場で詠じたものとするのがどうもおかしい。石川からへだたった所で想像で歌ったのではこの歌の生々しさが半減すると梅原氏はおっしゃるが、半減するかどうかは読者の受取り方である。今、万葉集を見ると、

大野山霧立ち渡るわが嘆くおきその風に霧立ち渡る（巻５、山上憶良）

の「大野山の霧」は憶良が大野山にのぼっての作でなく、大野山を眺めての作であると思う。「春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る」（巻５、梅花宴の中の作）も旅人邸での作で、春の野の作でない。大伴家持が越中にあって、雨が降らず、旱天が続いたころ、雨雲を見て作った歌の中に「……あしひきの山のたをりに　この見ゆる天の白雲　わたつみの沖つ宮べに　たち

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

渡り　とのぐもりあひて　雨も賜はね」(巻18．4122）と作っているのも、かなりの距離で雲を眺めての作である。その他略するが、雲立ち渡るは、距離を置いて雲を見ての作としての用語が多い。したがって、依羅娘子の場合、石川と娘子の居る場所との間にいくらかの距離を考えるべきで、「『石川に雲立ち渡れ」という表現はやはり夫の死の現場で歌われたもの』と梅原氏が思っていられるのはいかがと思う。これが本節で私の言いたい第３点である。

つぎに、梅原氏は、その依羅娘子の作二首につづく、丹比真人の「人麿の意になぞらへて、(娘子に）報（こた）ふる歌」

荒浪に寄りくる玉を枕に置きわれここにありと誰か告げなむ

について「私は、荒浪によせてくる玉を枕にして、この海底に沈んでいるけれど、私がここにいると誰がお前に知らせようか。誰も知らせてくれる人はなく、私は永久にここに沈んでいるのだよ」と解していられる。そして丹比真人が人麿が海底に死んでいることを教えているのだと言われる。しかし、本節で私の考えたように、「貝に交る」はおかしい。「峡に交る」「谷に交る」の方が「交る」という語からふさわしいと思われるとすると人麿は山中で死んだことになる、あるいは、死後その死体が山中に葬られていることになってこの丹比真人の作はやはりオカシイのである。

氏は、峡にすることは「(1)言葉を無理に改め、(2)依羅娘子の切実なる悲しみをあいまいにし、(3)何よりも人麿の死の真相を暗示させるために、万葉集の編者が丹比真人の名によって加えた大切な歌を全く除外してしまう点において、到底許されない解釈である」と言っていられるが、私案によれば、(1)については峡の方が自然である。(2)について、「依羅娘子の切実な悲しみをあいまいにし」と言っていられるが私はそうは思わない。娘子が人麿の死んだ石川の方を見つつ「見つつしのはむ」と歎いたのでは、その歎きが出てないということはないと考える。また、氏は「谷に交りて」を全く無視している。

また、万葉集巻２挽歌のはじめに、有間皇子が皇太子中大兄皇子のために、おそらく陥れられて刑死した有間皇子関係の作が６首見える。その皇子の作は、人も知る

磐白の浜松が枝を引き結びまさきくあらばまたかへり見む（巻2．141）

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

である。この歌を作って、皇子は紀の湯にゆき、そこで斉明天皇や皇太子中大兄に取り調べられたのち、この磐代を過ぎ、藤白の坂で縊り殺されたというのが日本書紀の記事である。ところが、この有間皇子の歌につづいて、後人、長忌寸意吉麻呂２首、山上臣憶良１首そして、割注によれば柿本朝臣人麻呂歌集中の歌１首と計４首が収められている。そのうちに

- 磐白の岸の松が枝結びけむ人はかへりてまた見けかもむ（巻2．143、長忌寸意吉麻呂）
- 後見むと君が結べる磐白の小松がうれをまた見けむかも（巻2．146、人麻呂歌集中の歌）

の２首があるが、この２首は、その有間皇子が、「またかへり見む」と詠じた磐白の浜松を見なかったように詠じている。この方が感じが深いのであるが、どうしてこう詠じているのであろうか。日本書紀が誤っているのか、この２人が誤っているのか。この期の「日本書紀」は正しいと思われるのでこの２人が誤っているのでなかろうか。こういう事実が、私などをして、丹比真人の海岸で人麿が死んだという歌が事実を誤っていると考えさせるのである。私は、貝より峡が正しいと考える見方からこう言うことに到達するのであるが、梅原氏は、人麿が流刑、海中に投げこまれて殺されたという見地から、峡説を否定して、交りての語意など考えることなく、貝説を採っていられるように思うがいかがであろうか。私の方は「貝に交りて」か「谷に交りて」かの「交りて」の語解から自然とこういう解になるのである。

終　り　に

以上をもって本稿を終える。どうもわが狭岑島が流人島であることについてナットクできないので、一文を草しようと考えたところ長文となってしまった。この梅原氏の論が今後認められてゆくかどうか、これから気を永く持って見てゆこうと思う。

なお、私は古い時代は「千早ふる」という枕詞が示すように、神が荒ぶるものであって、時に人間に害を及ぼした。思わぬ被害があると神のわざと考えたのだが、いつからか、荒ぶる神がなくなって、おそらく佛教がさかんになった聖武の御代から神の威力が落ちてきて、代って、人間の怨霊が活躍するようにな

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ってきたのでないかと考えている。京都の御霊神社に祭られている怨霊となった人々は奈良中期以後の人々であることがそのことを語っている。いつか天武系皇子のほとんどが罪せられ、死んでいる。そのことを考えて、天武がどうして怨霊にならなかったのか。大津皇子や高市皇子や長屋王がどうして怨霊になってタタリをしなかったのかと考えたことがあるが、結局、人のタタルのはもうすこし後の時代なのであろうと考えた次第である。　（昭49.6.30）

（注）

1　十返舎一九の「金昆羅参詣続膝栗毛」では、弥次喜多の乗った金昆羅船は申の刻すぎに丸亀の河口（万葉集に見える中の水門の河口）に着いたが、潮干の時だったので、満潮を待って暮過ぎるころ、川中に乗り入れたとある。人麿の船は金昆羅船より小さかったろうけれど、潮の満ちるのを待って停泊したのではあるまいか。「わが船は比良の湊に漕ぎ泊てむ沖へな離（さか）りさ夜ふけにけり」(巻3.274)　という高市黒人の作もそれを語っているように思う。出航に際しても同様で、額田王の「熟田律に船乗りせむと潮待てば」の歌がそれを語っている。人麻呂が早朝に中の水門を出発したとはきめがたい。狭岑島へ着いた時は停泊する時刻であったかも知れない。

2　塙書房刊、昭35.1. 25発行。

3　もし、「貝に交りて」と、貝に解したら、「谷に交りて」の「谷」と全く無縁である。全く無縁の「一云……」が万葉集中にあるのだろうか。